

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00934

研究課題名(和文) 出雲系神話の成立と変容 ヤマトノヲロチ神話を中心に

研究課題名(英文) Study of the formation and transformation of the myth of Izumo through the analysis of the myth of exterminating Yamata no worochi

研究代表者

森田 喜久男 (Morita, Kikuo)

淑徳大学・人文学部・教授

研究者番号：10742132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本神話の中でも著名なヤマトノヲロチ退治神話成立の歴史的背景として、6世紀から7世紀にかけて、ヤマト王権が、白村江の戦いに備え、出雲と吉備を一体的に掌握し、軍事動員をかけた史実と関係していることを明らかにした。次に、王権神話であるヲロチ退治神話が近世以降、地域社会に広がった前提として、『古事記』・『日本書紀』の神話を再編した『先代旧事本紀』の影響を確認できた。

また、ヲロチを退治したスサノヲは、中世には悪神であると同時に英雄であるという二面性を持っていることが明らかにされた。さらに、ヲロチ退治神話が鉄の生産に関与した人々と関わっているという考え方は、近代以降に成立したことも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヤマトノヲロチ退治神話の分析を通して、出雲系神話は出雲を含めた山陰地方だけではなく、吉備や安芸など山陽道諸国や朝鮮半島とも深い関わりを持ち、空間的な広がりを持つことを明らかにできた。また、時代の変化に対応して、さまざまな解釈が加えられ、変容した神話がどのような形で地域社会へ浸透していくのか、この点についても明らかにできた。

さらに、今日、地域社会でイメージされているヤマトノヲロチの姿は、近代以降に形成されたことなども明らかになった。本研究は、中国山地という具体的なフィールドから出発している。神話研究における現地調査の有効性を提示できた点で、従来の神話研究に一石を投じたものであると確信できる。

研究成果の概要(英文)：The historical background of the establishment of Yamata no orochi extermination myth, which is famous among Japanese myths, is the historical fact that from the 6th century to the 7th century, the Yamato sovereignty unified Izumo and Kibi in preparation for the Battle of Hakusenko and mobilized military forces. revealed to be related to Next, we confirmed the influence of the "Sendaikujihongi," which reorganized the myths of "Kojiki" and "Nihon Shoki," as a premise for the spread of the myth of exterminating Orochi, which is a myth of royal power, in the local community since the early modern period. In addition, it was revealed that Susanowo, who exterminated the Worochi, had the dual nature of being both an evil god and a hero during the Middle Ages. Furthermore, it became clear that the idea that the myth of exterminating the Orochi was related to the people involved in the production of iron was established in the modern era.

研究分野：日本古代史・神話学

キーワード：ヤマトノヲロチ スサノヲ 出雲 吉備 ヤマト王権 神楽 鉄生産

1. 研究開始当初の背景

ヤマタノヲロチ退治神話は、『古事記』や『日本書紀』（以下、記・紀と略称）の出雲系神話の中で重要な位置を占めているが、何故、出雲がヲロチ退治の舞台とされたのか、この点については、先行研究において明確な解答がなされていない。その最大の原因は、この神話が出雲に関わる神話であるといった漠然とした理解にとどまっており、出雲という地域社会それ自体の中でヲロチ退治神話について考えるという視点がなかったからである。また、中世以降、中国山地に伝わったヤマタノヲロチ退治に関わる地域の伝承については、荒唐無稽の一言で切り捨てられ、歴史学や文学の研究者にはほとんど顧みられることはなかった。しかし、地域の伝承の分析を通して、王権神話である記・紀神話を地域社会がどのような形で受容したのか、この点を考察しなければ、神話の持つ機能や役割を明らかにすることはできない。

そこで、本研究では、神話の舞台とされた場所を実際に踏査し、そこを研究のフィールドとして設定し、日本古代史・日本中世史・民俗学・考古学の4つの分野の手法を取り入れた研究を推進することとした。

2. 研究の目的

本研究では、記・紀神話のうちで、出雲という地域社会を舞台としたヤマタノヲロチ神話に焦点を当てて、現地調査を実施しながら地域社会の中で神話を読み解き、神話の成立・変容の過程を解明することを最終目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究においては以下のような方法でアプローチを行った。まず、古代におけるヤマタノヲロチ退治神話成立の歴史的背景を明らかにするために、記・紀神話の他に『出雲国風土記』に見える出雲山間部の郡司氏族の存在形態を古墳の分布と対比させながら、出雲山間部の政治的状況を見ていくと共に、出雲山間部が記・紀神話を生み出した古代王権とどのような形で関わっていたのか、出雲山間部は古代王権にとっていかなる意味で重要であったのか、これらの点について検討を加え、ヲロチ退治神話成立の歴史的背景を解明した。

次に、中世以降のヤマタノヲロチ退治神話の変容と地域社会への受容の様子を具体的に明らかにするための史料として、大永3(1523)年に河内国に住む李庵光通という禅僧によって書かれた『天淵八又大蛇記』や享保2(1717)年に近世の松江藩で編纂された地誌である『雲陽誌』に記されたヲロチ退治神話の伝承地を実際に踏査し、神話受容の実態について検討を行った。

また、ヲロチ退治の神話が、狭い意味での島根県出雲地方だけではなく、中国山地一帯に広がっていることから律令国家が設定した安芸国や備前国・備中国・備後国に相当する地域、広島県や岡山県の伝承地も踏査し、山陰・山陽両地域の中でヲロチ退治神話を見つめ直すことを試みた。

さらに、ヲロチ退治神話の解釈の歴史、それ自体が神話の変容を意味するものであるという認識に立って、研究史の整理を行った。また、先に挙げた『雲陽誌』の他に、『懐橘談』・『出

『雲神社巡拝記』などの近世史料からヲロチ退治伝承地に関わる史料を抜粋し集成した。

4. 研究成果

(1) 現地調査

①2018 年度

研究協力者の品川知彦氏・岡宏三氏・仁木聡氏と共に、広島県安芸高田市において、ヲロチ退治伝承地を踏査した。まず郡山山麓にある清神社を訪れた。この神社はスサノヲやイナダヒメを祭神とし、付近には、可愛川・稲田橋・稲田川など『日本書紀』一書に登場する安芸を舞台としたヲロチ退治伝承の地名が残されていることを確認出来た。また、ヲロチ退治の舞台となった地域の景観を展望台より確認できた。安芸高田市歴史民俗資料館では、正徳6(1716)年作成の安芸国高田郡図を閲覧する事ができ、その積文を入手できた。

今後、その分析を行うことでヲロチ退治の舞台となった地域の歴史的景観を復元する事が可能となった。三次市口和町から島根県奥出雲町仁多まで車で走り、山間部における両地域の一体性を確認できた。

②2019 年度

島根県奥出雲町へ移動しヲロチ退治伝承地を踏査した。奥出雲町の横田観光協会で奥出雲町の神話伝承地のマップを入手した後、横田地区のヲロチ退治神話の舞台としてヲロチの尾から出た天叢雲剣の刃を磨いたとされる磨砥の伝承地を調査し、クシイナダヒメ誕生地とされる産湯池、笹宮を調査した。続いて鳥上地区に移動し、スサノヲの子イソタケルを祭る鬼神神社を調査した。鳥居の脇の船は、イソタケルが乗ってきた船であるという。この後、船通山に登った。途中、ヲロチが潜んでいたと伝えられる鳥上滝を実見した。また、スサノヲの宮と伝えられる城山に登った後、布施地区へ移動し、クシイナダヒメの父母にあたるアシナヅチ・テナヅチゆかりの長者屋敷、鏡の池、スサノヲがヲロチを退治した後でクシイナダヒメと結ばれた八重垣神社旧社地などの現状を実見した。この後、スサノヲの子イソタケルが朝鮮半島から乗ってきた船が変身したとされる巨岩のある岩伏山を登頂し、かつてこの山頂において祭祀が行われていた痕跡を確認できた。

従来、ヲロチ退治にまつわる神話は、出雲山間部の場合、雲南市木次が知られていたが、今回、奥出雲町の各地にあまり知られていないヲロチ退治の神話が多数残されていることを確認できたのは大きな収穫であった。また、奥出雲町には『古事記』の神話ではなく、『日本書紀』一書(本文に対する異伝)のヲロチ退治の神話を再編した『先代旧事本紀』の神話が大きな影響を与えているという事実を確認できた。

③2020 年度

ヤマタノヲロチ退治に使用された剣が祭られていると伝えられる石上布都魂神社を調査した。この神社は岡山県赤磐市に位置する。同社は赤磐市でも山間部にあり、参道として急な階段をつづら折りに上った後、神社に到達したが、元宮はそこよりもさらに奥、すなわち山の頂

上にあった。江戸時代は、そこに神社があったという。その背後には巨大な磐座が存在しているので、そこが古代以来聖地であった可能性はある。それがいつの頃からか、ワロチ退治の神話と結びついたのであろう。

④2021 年度

山口県萩市須佐へ行き、須佐駅で神話伝承地に関わるパンフレットを入手した上で、スサノヲが朝鮮へ渡る際に航路を確認したと伝えられる高山（神山）の山頂へ登り、須佐湾を遠望した。この後、黄帝神社を見た上で須佐湾沿岸を踏査した。その後、スサノヲが朝鮮半島から渡来したとされる場所として島根県大田市仁摩町宅野港から韓島を遠望し鳥居を2つ発見し、今も信仰の対象地であることを確認できた。次に五十猛漁港に行き、高麗の浜、韓郷山、韓神新羅神社を見た。また、スサノヲの子であるイタケルとオオヤヒメに関係する逢浜、五十猛神社、国分霹靂神社、唐松、大屋姫神社を踏査した。

今回の調査の結果、港や河川などの海上交通の要衝地や、水陸の結節点などがスサノヲに関わる神話の舞台となり得るという事実を確認できた。

⑤2022 年度

最終年度は、出雲と吉備の交流がワロチ退治神話に与えた影響について調査した。まず、岡山県真庭市北房町の北房ふるさとセンターにおいて、大谷・定古墳群の出土遺物、大谷1号墳出土の双竜環頭大刀・金銅製品、定北古墳の陶棺・銅鏡の蓋などを実見した。これらの出土遺物は出雲の古墳とも共通する部分がある。出雲と吉備との交流を示すものとして貴重である。このあたりは、7世紀前半に吉備大宰が常駐した場所でもある。6～7世紀代における出雲と吉備の交流はヤマト王権を介在したと考えざるを得ない。ワロチ退治神話の舞台が出雲だけでなく吉備や安芸に分布しているのはこのような歴史的事実と関係していることが実感できた。また、広島県福山市新市町素盞鳴神社を調査しスサノヲ信仰が日本海側だけではなく瀬戸内海沿岸に広がっていることを確認できた。

(2) 史料の集成

ワロチ退治神話の出雲における受容や変容の過程を研究するための素材として、近世出雲の地誌から、ワロチ退治に関わる伝承を収集し採録した。収集の対象とした史料は『雲陽誌』・『懐橘談』・『出雲稽古知今図説』・『出雲式社考』・『出雲神社巡拝記』・『出雲神社考』である。ただ、『出雲稽古知今図説』・『出雲式社考』・『出雲神社考』については、活字化されておらず、島根県古代文化センターの保管されている個人蔵の古写本であるため、対校にもとづく校訂が必要とされる。よって、報告書刊行に際して公表した史料は、『雲陽誌』・『懐橘談』・『出雲神社巡拝記』にとどめた。その他の史料については今後、他の古写本と対比させながら校訂して公表することとしたい。

(3) 研究代表者及び研究協力者の研究成果

まず、本研究の研究代表者であり、日本古代史を専攻する森田喜久男の研究成果について述べる。森田は、この研究を通して、スサノヲやオオナムチを含めた出雲系神話の神々は、天下経営に深く関わっており、カムヤマトイワレヒコは、そのような出雲系の神々の系譜を引く女性を正妻にしたので初代天皇になれたというのが『日本書紀』の神話の論理ではないか、という問題提起を行った。その中で、『日本書紀』の本書（本文）と一書は決して対立するものではなく、一書は本書を補完する形で機能していることを指摘した。また、森田は、出雲に伝えられた大蛇退治の神話は、『古事記』や『日本書紀』そのものではなく、『先代旧事本紀』の大蛇退治神話であった可能性が高いことを指摘した。

次に研究協力者であり、考古学を専攻する仁木聡の研究成果としては、鉄鏃の分析から、古墳時代終末期の出雲がヤマト王権によって媒介される形で吉備と深い関係にあったこと。王権にとっては、出雲と吉備とが一体的な存在として扱われていたことを明らかにしたことが大きな成果である。これは白村江の戦いなど対外的な緊張の中で。ヤマト王権による両地域への軍事動員と無関係ではなく、こういった歴史的情勢を背景にヲロチ退治の神話は成立したのである。ヲロチ退治の神話の中に、出雲だけではなく安芸や出雲が登場するのはこのような事情からである。

同じく、研究協力者であり、宗教学・民俗学を専攻する品川知彦の研究成果としては、ヲロチ退治の神話に関する研究史を丹念に整理し、ヲロチ退治神話と鉄生産を結びつける見解は、大正年間以降に成立したものであり、当時は異様な説として扱われていた可能性があること。しかし、記・紀批判の研究で著名な津田左右吉がこの学説を引用したことにより、地元出雲では権威ある説として受け入れられた可能性があることを明らかにしたことが最大の成果と言える。

もう一人の研究協力者であり、日本中世史・近世史を専攻する岡宏三の研究成果としては、中世におけるヲロチ退治神話の特色として、日照りに伴う雨ごいのために竜に対して娘を捧げる誓いをなすというストーリーが加わることで、出雲系神話と言っても、実は修験道の山伏や僧侶などの宗教者や能など芸能に関わる人物によって、出雲に他地域の竜と天女の伝承がもたらされ、その影響により出雲の大蛇退治が変容することが指摘した点が特筆すべきことである。

続いて、森田は「ヤマタノヲロチ退治神話の変容と受容の研究に向けて」と題する報告を行い、出雲に伝えられた大蛇退治の神話は、『古事記』や『日本書紀』そのものではなく、『先代旧事本紀』の大蛇退治神話であった可能性が高いことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------